

## 松本礼二『知識人の時代と丸山眞男』合評会 討論記録

松本礼二 松本でございます。こういう機会を設けて拙い本を論評していただき、まことにありがたいです。ほとんど書評も出ななかり前ですが、コロナのせいで一年以上延ばされて、いささか気が抜けたところがありますが。

最初にお三方、大変懇切に、親切で丁寧な論評をいただきありがとうございます。以下、お話を伺った順に鷺巣さん、宇野さん、趙さんという順番でリプライをさせていただきます。

鷺巣さんのお話は、最初の「本書に触発されたこと」として言われている要点に即して。大変褒めていただいてありがたいのですが、ちょっと買いかぶりすぎのところがあって、私、こそばゆい思いがいたします。第一に「周到に編集された論文集」と言われましたが、ぜんぜん周到に編集していません。個々の論文、エッセイはその時その時に、だいたい多くは注文を受けて書いたものであって、相互の関連はまったく意識しておりません。周到に編集されたという印象があるとなれば、それは編集者の方の功績であって、著者としては一つのみ

とまりをどうつけるか、後から苦心しただけです。

ただし、後から読み返してみると、ある種の一贯した問題意識のよ仕事ではないわけですね。本業はトクヴィル研究で、日本についてのくのは自分の本業ではないのですが、ある時期から英語やフランス語の研究者と付き合う中で、日本について書いたり喋ったりすることを求められたということがあります。その意味で、外国語の読者に向けて日本を語っている文章がいくつ含まれているということです。

それからもう一つは、鷺巣さんが言われましたように、やっぱりみんな一九八九年以後の仕事だと。それはやっぱり振り返ってその通りであります。私自身が学問らしいことをはじめたのは一九六〇年代の中頃——鷺巣さんも同じでしょう——からですが、その世代経験から見て、八九年に冷戦が終わり、ソ連もなくなるといのはやっぱり大事件です。つまり、われわれが歩き出したときの思想や学問の在り方、趙さんのお話しにあった戦後日本の社会における自由主義と民主主義という問題についても、一九六〇年代から七〇年代において私たちが

当然としていたような見方というのは、やっぱり八九年に崩れたということがある。それは日本だけではなくて、ヨーロッパやアメリカでもある程度そうです。

その転換について、対応はもちろん人によって違います。早くから八九年を予想していて、八九年でないとしてもいずれソ連社会主義体制は崩壊すると思っていた人はゼロではないと思うけれども、西欧においてもしっかり少なかったと思います。社会主義体制に批判的であつても、あれはあれで存在していると、そこに何かの意味があるんだという、そういう前提がやっぱり広く共有されていた。欧米のリベラルという人たちについてもそうだと思うんです。その前提がやっぱり大きく崩れてしまった。それだけに、極端に言えば社会主義はなかった、なくしてしまうという前提で思想や歴史を考えようという傾向が、やっぱり欧米でも出てくる。そうした考えに対してある種の抵抗があつて、歴史を振り返ればそうではないということを言っておきたいと、そういう問題意識がたぶん一貫していると言え言えるかもしれません。あとづけですけれど。

「挑発的な論文集」——自分では挑発的だという意識はあまりないのですけれども、ただ、今言ったような観点から、誰でも言うようなことは言いたくない、できればみんなが言い落していることを探していこうという、これも後づけですけれども、そういう態度があらわれているという面はあるかもしれません。

三番目、「わかりやすい文章」——これは大編集者の鷺巣さんにわか

りやすいと言われると大変うれしいです。ごく最近、この本を関西のフランス現代政治をやっている近しい友人に贈ったら、学内誌に書評というか紹介をしてくれました。活字で本書を論評してもらったのは有り難いのですが、そのなかで文章が難解だと書いてあるので、いろいろ批判を受けるけれど、文章が難解だと言われるのはあまり覚えがないと、その点だけ抗議したのです。そういうこともあつて、大ベテラン編集者の鷺巣さんに文章が分かりやすいと言っていたいたのは、私としては大変ありがたいです。

四、五の目配りの良さ、逆説とかそういうのはやっぱり、せっかく書くのならあまり人が言わないことを言おうという意識が出ているのだと思います。ただ、全体としてはそんなに奇矯なことを言っているつもりはないのですけれど。

それから壮大な構想の展望——ただしこれは展望というだけで、自分自身が壮大な構想を持っているわけではないので、知識人論にしても、翻訳文化論にしても、思いつきみたいなものです。後の人が引きついで問題を展開してくればありがたいというつもりで書いているので、鷺巣さんがおっしゃるように、共同研究の課題を提示したようなものです。その意味で、趙さんが最後に、まさに壮大な構想をもって戦後思想についての自由主義と民主主義という話をされたのは、そういうふう読んでいただければ大変ありがたいと思えました。自分自身としての構想は大したことはないのですが、これも買いかぶっていたいたようなものですが。

それからもう一つ、鷺巣さんが言われたことで、留学の問題での林達夫の例はおもしろいですね。やっぱり世代から言えば本来留学しようと思えばできたはずだけれども、なぜ行かなかったか、事情は知りませんけれども。書物を通じてヨーロッパの文化、思想についてあだけの認識を持った人が、七十過ぎではじめて行ったということ。断片的にしか書いていないですよ、旅行記は。ちらちらと見ても、やっぱりこれはおもしろいと思いました。ある意味で大塚久雄さんもそうです。大塚さんは林達夫ほど百科全書的ではないけれども、やっぱりヨーロッパに行ったのはものすごく遅いでしょう。七十ということはないと思うけれども。大塚さんの直系の経済史の先生から、大塚さんがああいう仕事ができたのはイギリスに行つてなかったからだ、と行っていたらとてもあんなことは言えなかったことを聞いたことがありますけれども。だから大塚さんとカ林達夫というのは、私がガラバゴス的と言うことの——これはいい面と悪い面と両方あると思いますけれども——例です。本当に林達夫はとてつもないヨーロッパ文化についての知識を持っていて、その人が「七十歳を過ぎて」はじめて行くという、そのおもしろさがあると思います。

次に宇野さんのお話ですが、これも前半で克明に理解していただいたのはその通りで、特に申し上げることがないので、最後に言われている「著者への問い」の三つ——知識人の時代が終わった時代になぜ知識人を論じるか、それから日本の社会科学の遺産の継承の問題、

そして丸山・トクヴィル関係、この三つの質問が具体的なのでお答えします。

最初の問いに対する答は非常にはっきりしているのです。私のスタンスは、知識人の時代が終わったから知識人を歴史家として論じることができるようになったと。それは、この論文を書いたときに依拠したフランスの歴史家あるいは社会学者、シリネリとかクリストフ・シャルとかその他の人たちのスタンスも同じだと思います。これも日仏会館のシンポに呼ばれて話したのが元ですけども、そのころフランスの歴史家や社会学者が知識人の歴史を論じていて、その仕事を見ていて、ああ、日本でも同じことが言えるなど感じたわけです。どこかに引用しておきましたが、「大思想家の秋は知識人を扱う歴史家の春である」というのは、まさにその通りだと思います。

もちろん宇野さんが言われるように、その上でなお知識人のことを論ずる、ある特定の時代における知識社会学的な集団としての知識人ではなくて、歴史貫通的に、本質的な意味での知識人が存在するとして、これを論ずるといふ立場はもちろんあると思います。ただ、それを私はあまりとらない。そういう立場でやると、大知識人をほめそやすか、そうでなかったら知識人というのはみんなインチキだという話のどちらかになりがちなので、やっぱりある特定の時代の特定の人層としての知識人ということを書く。ただし、その知識人の捉え方は問題意識と歴史の対象によって伸縮します。鷺巣さんが福沢や兆民は入ってこないと言われるのは、この本では二〇世紀のある特定の歴史

状況として知識人の時代を捉えているからなので、もう少し広げていったならばもちろん福沢や兆民も入り、あるいは江戸時代の、渡辺浩さんの領域だけでも儒者や国学者も含めて知識人の問題を考えることもできます。丸山さんの「近代日本の知識人」というのは江戸まで戻っている。対象は問題の設定次第で動くと思います。

宇野さんの二番目の質問ですね、日本の社会科学の遺産をいかにして継承するか。これも、私自身、日本の社会科学の遺産の継承という意識は初めからありましたが、さっき言った象徴的な意味で一九八九年以後になると、それだけではすまなくなったということからこういう問題を出したのです。水村美苗さんのように文学に問題を限れば、文学は創作だから自分で立派な作品を書けばいいわけけれども、社会科学や歴史になるとやっぱりそうはいかない。一つは言語の問題があつて、文学作品は日本語でもよい作品ならみんな翻訳される。日本の社会科学で、外に向かつてどう言うかというのは、これも大変な話だろうと思います。ただ、日本の社会科学のこれまでの蓄積はガラパゴスの環境の中でなされたという一面があることは意識しておいた方がよいだろうと思います。これも渡辺さんの領域けれども、やっぱり江戸時代の儒学の発展というのほまさにガラパゴスの環境だけれども、だからこそ東アジアの儒教文化のなかで独自のものが生まれたという、そこに渡辺さんの、丸山さんもそうだと思うけれども、丸山・渡辺の江戸時代認識の意味があると思うんです。だからやっぱり、自分自身のやっていることがいかにそういう意味で制約を受けているか

を意識することがまず出発点であつて、その上でという話だと思うんです。

継承については、近代日本の社会科学あるいは歴史学の例を言いますと、たとえば、アンドリュー・パーシエイの著書『近代日本の社会科学 丸山眞男と宇野弘蔵の射程』NIT出版、二〇〇七年』は、戦後社会科学のなかで丸山政治学と同時に宇野経済学をとりあげているわけでしょう。そういう仕事が出ているし、それからシュヴェントカーの日本におけるウェーバー研究（『マックス・ウェーバーの日本受容史の研究一九〇五―一九九五』みすず書房、二〇一三年』というのをドイツ人がやっている。そういうことをやっぱり日本の研究者も意識して展開しなければいけないだろうということが一つ。

ガラパゴスの環境でものすごく流行ったけれども、いま誰も読まないという典型は、宇野さんもたぶん読まないだろうと思うけれども、僕らの世代でフランスをやったら必ず読まれたのは高橋幸八郎さんの仕事です。『市民革命の構造』（御茶の水書房、一九五〇年）とか、大塚史学のフランス版みたいなものだけれども。しかし宇野さんも読まないとなると、今の東大社研に高橋さんの仕事はどう受け継がれているのかしら。僕は社研の助手をしていたときに高橋幸八郎さんが定年間近でいらっちゃって、直接話を伺ったことがあります。宇野経済学の継承者はいまだに東大社研のなかにはいると思いますけど、高橋史学の継承者はいないんじゃないかな。

宇野重規 残念ながら宇野派もいなくなりました。

松本 とにかく、われわれより上の世代でフランスの歴史をやった人は——近代史、革命史はもちろんですけども——みんな高橋幸八郎から始めたのです。あれはどう継承されたのか。何年か前に、名前を忘れたけれども、女性のフランス史の人が高橋幸八郎さんとジュール・ルフェーヴル——フランス革命史の大先生ですが、高橋幸八郎さんは戦前からルフェーヴルと文通をしていた——の交流について論文を書いています。高橋さんはある程度年はとっていたけれども、戦後の留学の第一号ですよ、森有正さんなどと同じで。ところが、直接会ってみると、ジュールジュ・ルフェーヴルと高橋さんとは話が全然合っていないというのが、その論文〔高澤紀恵「高橋・ルフェーヴル・二宮——「社会史誕生」の歴史的位相」『思想』第一〇四八号、二〇一一年八月〕の趣旨でした。つまり、ルフェーヴルは歴史家としてもかく史料に即してちゃんとやりなさいと言うけれども、やっぱり高橋史学というのは概念操作なんです。

ただ、戦後の日本の社会科学や歴史学で一番最初に「国際的に名声を得たのは高橋幸八郎さんですね。封建制から資本主義への移行をめぐって、モリス・ドップとアメリカのポール・スウィージーというマルクス主義者同士の大論争があって、それに介入して世界に名前を知られた。大塚さんはその後にヨーロッパに行つて、お前は高橋の弟子かと言われたという話をだれかに聞いたことがあるけれども。まさに高橋幸八郎さんの仕事は、戦前からの経済史へのマルクス主義の概念的受容の結果として出てきたわけだけでも、今まったく忘れられ

ている。ガラパゴス化ということを言ったときに、いい面もいろいろあるんだけど、ちょっとこれはというので一番頭にあったのは高橋史学です。

第三点、丸山・トクヴィル関係ですね。理論的・思想的内容については、丸山さんはやっぱりトクヴィルとそう重ならないと思うんです。やっぱり知ったのはかなり遅いし、何と言つてもヘーゲル、マルクス、ウエーバー、シュミットというドイツ系の学問でできている人ですから。そういう理論内容とはちょっと違うところで重なりがある。「敗北」体験が共通しているという宇野さんの指摘については、*Souvenirs*の読み方に触れてちょっと書いておきました。むしろ間に福沢を置いて考えると、丸山⇨トクヴィル関係も見えてくるのではないのでしょうか。福沢とトクヴィルは、福沢自身が意識している以上に、結構似ている。直接引いている『分権論』だけでなく、思考様式が似ている。丸山先生が考えている以上に二人は似ているのではないか、というのが私の考えです。似ているというのは、思考様式が似ている。それはトクヴィルから学んだというより、もともとそうだった。これは私が英語で書いた論文である程度論じました。本書の第八章の「丸山眞男はトクヴィルをどう読んだか」というのも、もとは英語論文なんですけれども、その前半は——そちらの方が長いのですが——福沢はトクヴィルをどう読んだかという話です。もとは *Tocqueville's voyages* という、*Liberty Fund* というアメリカの、どちらかと言うと保守的なシンクタンクが論集 (Christine Dunn Henderson, ed., *Tocqueville's*



『Voyages, Liberty Fund, 2014』を出して、それに寄稿したのですけれども。これは、トクヴィルのデモクラシー論は日本に大いに妥当するというのがメインの議論ですけれども、その前に受容の問題、レセプションの問題も論じていて、そこは要するに福沢です、ほとんど。そこで言ったのは、『分権論』で直接トクヴィルを引いているだけでなく『学問のすゝめ』の論点にトクヴィルの論理と重なるところがあるという点です。一つはもちろん集権制批判ですが、学問論もやっぱりかなり重なる。特に『学問のすゝめ』の十五編「事物を疑って取捨を断ずる事」、懐疑の精神こそ大事だが、しかし「取捨を断ずべし」と言っている。ヨーロッパの精神の核心は懐疑の精神だと言った上で、西洋化は必然だけれども何でもかんでも西洋化してはいけないということも言っている。あれなどはトクヴィルの学問論と非常に重なる面があると思います。

さらに言えば、要するに福沢は結局、維新によって西洋化するということは必然だと認めた上で、今言った『学問のすゝめ』の十五編もすでにそうですけれども、ある時期からは、一辺倒な西洋化に対して留保を付するという姿勢が強い。これは、丸山さんの福沢研究で言えば「忠誠と反逆」に一番はつきり出ている。つまり、大勢としての西洋化は必然として認めながら、そこからこぼれ落ちるものに対してむしろ古いものから学ぶべきだという。これは、トクヴィルにおけるデモクラシーとアリストクラシーの関係と非常に似ていると思うんです。そういう意味で、丸山さんも戦後のデモクラシーに対して、ある

時期からはそこから落ちるものの意義を論ずるようになっていく。「忠誠と反逆」もそうですけれどもね。やっぱり福沢とトクヴィルというのは、そういうふうな私の見る限りでは福沢本人が意識している以上に似ている、繋がっているというのが私の考えです。

ついでに言う、山崎正和の個人主義に関して、「社交」の話。私はあえて、ちょっと書いたけれどもやっぱり福沢にとっても「社交」——福沢のことばでは「人間交際」ですよ、*social*——は非常に大きな意味があつて、それで慶應をつくり、「明六社」もそうでしょうが、「交詢社」なんていうのもまさに彼なりの社交世界を作ろうとしたんだと思うんです。ただ、山崎正和氏の方はやっぱり趣味の世界に繋がると、やっぱり権力への距離感というのが福沢の場合と違う気がします。福沢にしても、ある時期以降、明治政府の欧化政策は支持したわけですが、政府そのものとは一貫して距離をおいている。山崎正和氏とサントリー財団にはそれをあまり感じないというのがあります。

最後に趙さんのお話はまさに、私としては若い人が受け取って発展させてくれればと思つて書いた意味を受けとめていただいてありがたいと思います。要するに自由主義、民主主義、社会主義という、ちょっとシユンペーターの本のタイトルみたいですが、そういう話ですよ。それを戦後日本に即してお話しくださったんですけれども、私のこの本全体の視点、日本の問題は同時に世界と繋がっているという意味で言うと、むしろもっと巨視的に世界史的に見て、デモクラシー

とリベラリズムはどう調和するかということです。もともと調和しなかったものなんです、歴史的に見ると。第三章で書きましたが、あれを書いたときにはまさに、一九八九年以後の西欧はリベラル・デモクラシーの勝利で終わった、社会主義はやっぱり意味がなかったんだ、大損害を与えただけだという感覚がやっぱり大きかったわけで。今でもアメリカの政治家なんかは昔からアメリカはリベラル・デモクラシーだったんだと言っているでしょう。

それに対して、リベラリズムとデモクラシーというのはもともと違つたんだぞというのは、一九世紀ヨーロッパをやっていたら当然なんです。そして、そのリベラリズムがデモクラティックになっていくというのは、デモクラシーそれ自体の展開もありますけれども、ある時期からは社会主義のインパクトを受けてデモクラシーの方が転換した。普通選挙以来、その流れは一九世紀からたどれる。二〇世紀はもう一つやっぱり、一九二〇年代から三〇年代におけるファシズムとか全体主義の挑戦が決定的です。これはデモクラシーとは親和的ですが、ある意味で。しかし、リベラリズムとはまったく相対立する。しかし、全部飛ばしますけれども、西欧デモクラシーをスターリングラードが救つたんだという認識が戦後世界にはやっぱり強くあつて、これはヨーロッパもそうだと思います。そうでないというのも、もちろんありますけれども。そういう意味で、戦後体制、ニューディールと第二次大戦後の世界というのは、もちろんソ連に対抗しているけれども、ソビエト型の政治社会というものもある種のデモクラシーだという考

え方がある時期まではあつた。逆に、西欧デモクラシーもその社会主義の挑戦に応えなければならぬと、こういう考え方は、丸山さんが紹介しているラスキに非常に典型的に示されています。今の英米の政治思想をやる人はみんなラスキを信用していませんけれども。

ただ、やっぱりそういう面があつて、一九六〇年代ぐらいまでは、冷戦や朝鮮戦争やスターリン批判ということを全部飛ばして言うと、趙さんがこの本〔趙星銀『大衆』と『市民』の戦後思想 藤田省三と松下圭一〕岩波書店、二〇一七年〕で『岩波講座 現代』から話をはじめているでしょう。あれは要するに丸山さんはちょっと陰にかくれて、その影響下で福田〔欽一〕さんとか松下さんとかが前面に出ている。あれに福田さんが書いた論文〔『現代の民主主義——象徴・歴史・課題』〕『岩波講座 現代12 競争的共存と民主主義』岩波書店、一九六四年〕は、『近代民主主義とその展望』〔岩波新書、一九七七年〕になる。やっぱり二つのデモクラシーです。ソ連型もそれなりにデモクラシーであつて、それと対立するけれども、という話があつたと思ふんです。それは日本だけではなくて、マクファースンの『自由民主主義は生き残れるか』〔岩波新書、一九七八年、原著一九七七年〕という本があつたように、アメリカを含めてリベラル・デモクラシーにもいろいろ問題があるということを前提にしていた。要するに趙さんが戦後日本について言われたデモクラシーとリベラリズムとソーシャリズムとは対立しつつも、通底しているという意識があつたのではないでしょう。ある時期までは。

それともう一つ、欧米においては要するに反社会主義、反共産主義で、しかしナチには抵抗したという自由主義者がやっぱりいっぱいいたわけです。戦前の日本にはほとんどそれはいないわけでしょう。コミニストを含めて社会主義者、マルクス主義者が権威をもったというのは、やっぱり世界と共通しつつ戦後日本に特殊な背景がある。今は政府を含めて、誰もが日本はリベラル・デモクラシーで欧米と価値観を共通すると言います。でも本当にそうか、というのは今でもあつて、宇野さんが図らずも当事者になったようなことが起こる。ああいうことは本当のリベラル・デモクラシーで起こるの、という疑問が今でも時に出てくる。そういう意味で、つまり逆に言うと、反共ではつきりしていて、しかし全体主義には見事に抵抗したという自由主義者が戦後日本にはやっぱりほとんどいかなかったというのはある。だから逆に言うと、コミニズムを含めて社会主義者が、社会主義勢力が西欧的デモクラシーを日本に根づかせるためには必要なんだと。これは丸山さんの「ある自由主義者への手紙」の主張ですね。

こういうような状況は、私が学問をはじめた一九六〇年代から七〇年代ぐらいまでは共有されていた。それが全部変わったのは日本では、一つは新自由主義です。もう一つはやっぱり社会主義の崩壊で、ソルジェニツインの影響がものすごく大きいわけです。その流れが七〇年代の中頃から起きて、それを受けて……。ゴルバチョフが出てきたときには欧米の左翼は熱狂したと思いますけれども。あれが一場の夢に終わって、その後はフランス・フクヤマの世界になって、とい

う話が趙さんのお話の世界史的文脈として言えるのではないのでしょうか。

それから最後に、市民社会論について。趙さんが言われたように、市民社会論が行政の補完物になってしまった、それを体制化と批判的に見る立場はあると思います。ただ、私の受け取り方はちょっと違っていて、欧米の政治哲学で Civil Society というのをさかんに言った人たち、第4章の「戦後市民社会論再考」というのはヨーロッパ政治学者との共通のプロジェクトで、その相手方はみんな新左翼です。Ex-Marxistあるいは Neo-Marxist で、シヤンタル・ムフなども入っていた。松下さんも出発点はそのカテゴリーに入るでしょうが、ある時期以降具体的な政策論を展開した。そういう方向に市民社会論が展開したのは事実ですけども、思想史の問題として言うと、つまり社会主義をもう言えなくなった新左翼が市民社会論にわつと行つたという印象なんです、私の受け取ったのは。そう考えたから、待てよ、そういうことなら日本にその前例があるというので書いたようなところがある。

もう一つ、趙さんの言われた戦前の市民社会論、ウィットフォーゲルの『市民社会史』が新聞の広告に出ているというのはおもしろいですね。これを書いたときのウィットフォーゲルは一九二〇年代の純粹マルクス主義者の時代で、訳者の平野義太郎も転向する前なのかな。

この訳本のオリジナルは私、知りませんが、新聞広告とはいえウィットフォーゲルの市民社会論が出てくるというのは非常に興味深かつ



た。

驚異力 林達夫の留学のことについて、松本さんから質問とまでは  
いかなけれど、疑問が出されていたので、私の知る限りのことを申  
し上げます。林の父親は外交官で、早い時期に退官して翻訳業などを  
やっていた人です。林は学校に上がる前に父親と一緒にシアトルに  
行って四年ほど暮らしました。その体験がすごく大きい。しかし、父  
親がボンベイに赴任したときには一緒に行っていません。そのことも影  
響していたのか、林は父親との関係が悪いです。そして、林は学校の  
授業に馴染めなく一高を卒業しなかった。高校中退で、したがって大  
学入試を受ける資格がない。選科しか受けられなくて、選科に入った  
わけです。そのころも不仲は続いています。そういう訳で、留学資金  
を出してもらえないような環境にない。

もう一つは、神奈川県藤沢に高瀬三郎という資産家がいる、その長  
男が一高生だった。高瀬家は一種のサロンを作っていて、そこに長男  
の友人の秀才たちが集まっていた。長男には妹が五人いた。長女照さ  
んと結婚したのが和辻哲郎。三女喜美は数学者の窪田忠彦（のちに離  
婚）と四女松が美術史家の矢代幸雄と結婚し（のちに離婚します）、  
五女芳さんが林達夫と結婚したんです。京都大学在学中からかなり仲  
がよくて、高瀬家の親は反対したけれども、結局、林の大学修了直前  
に結婚する。そんなこんなで、結局、留学する機会を得られなかった。  
その代わり徹底して外国語を読むことで、西洋を理解しようとする。

したがって、林の翻訳に対する自負とこだわりはきわめて強い。

松本さんが触れているランソンの『フランス文学史』の少しあとに、  
ブリュンティエールの『仏蘭西文学史序説』が書かれますが、関根秀  
雄がそれを翻訳して刊行されます〔岩波文庫、一九二六年〕。その翻訳  
を林は『思想』（一九二六年九月号）誌上で、徹底的に批判する。原文  
を引いて、どこが違っているかを指摘して、絶版に追い込んだ。その  
とき林達夫は二十八歳、関根秀雄が三十歳です。しかも、絶版にする  
と同時に、関根による改訳を岩波書店は認めました。すぐに改訳が出  
るんです〔岩波文庫、一九二八年〕。このあたり、出版社の持っている  
力ですね。三十歳に満たない若手に、自社刊行物を自社の雑誌で批判  
させ、その刊行物を絶版にして、しかも批判された三十歳の若手に改  
訳させる。今どきの出版社がもっていない判断力だと思います。

林が翻訳に対して非常に厳しい態度でいたというのは、林にとつて  
は「翻訳」＝外国語解説は、ある意味「留学」です。彼らは留学して  
いるけれども自分はしていない、「翻訳」の世界は「自分の世界」だと  
いう自負があった、と私は思います。……しかし、翻訳に誤訳はつき  
もので、誤訳のない本はないし、そもそも誤訳か誤訳でないか、とい  
うのは非常に微妙な問題であることがありますよね。

宇野 懇切なお答えをありがとうございました。三点目に関して、  
丸山とトクヴィルは、福沢を入れると繋がるという話は大変示唆的  
でした。特に思考様式においてある種の共通性が見られるというのはと

でもおもしろい指摘で、なるほどと思いました。ですので、この三点目に関してはまったくその通りだと思っています。一番目と二番目についてさらなるご質問を——ご質問というよりは自分で考えろと言われて結局終わるかもしれませんが——させていただきたいと思いません。

第一点ですが、まさに「知識人の時代」が終わったからそれを歴史家として論じているのである、というのはその通りであると思います。私自身、決して時代を超えて普遍的に知識人なるものが存在するというロマンチズムに走るつもりはありません。あくまで知識人というものが特定の時期において、特定の社会形態において歴史的な存在として成立する、そして、それを歴史学的に、知識社会学的に研究するということはまったくその通りであると思います。そのこと自身に異議があるわけではありません。

たとえば本書でも一二ページ二行目に、「社会集団としての知識人が誕生し、政治と文化に重要な役割を果たす現象は、社会の平等化、民主化の進展途上のある段階に結びついている」とあります。つまり、伝統的な知識人とは別に、近代の学校教育によって知識人が生み出される。それは一定の平等化の結果であるが、まだエリートはエリートであって、ある程度一般の人とは違うという段階において、いわば平等化の過渡期において知識人があらわれるというのが、たぶんこのテーゼだと思います。逆に高等教育が大衆化してしまうと当然、知識人というものは成り立たなくなりますが、私は、これは基本的に正しい

テーゼであろうと思うのです。民主化、平等化の過渡期において知識人が成立するが、学校教育によって知識人が作り出され、それが大衆との間に一定の距離があることが条件となる。したがって、その距離がなくなると、知識人という存在もなくなる。私はこのテーゼに納得します。

ただ、正しいテーゼだろうと思う反面、結局知識人というのは平等化、民主化の過渡期に成立する、ある種の過渡的な存在で、当然に消えてしまうものであると言い切ってしまうのではないのだろうかという点に、若干の躊躇があります。結局、知識人というのはえらい、えらいと言っても、ある種の格差、微妙な差がある時代にのみ成り立つ話であって、差がなくなれば消えてしまう。あとはある種の専門家が残るだろうが、もはや知識人は成り立たない。おそらくその通りだと思いつつ、知識人というものをそのような民主化の過程、ある種の中途半端な時代に成り立つ、過渡的な存在であると言い切ってしまうと、それによって失われるものはないのだろうか、そこに若干の躊躇が残ります。これはご質問というよりは、私の自分に対する問いとして考えていきたいと思っています。

第二点なのですが、さきほど申し上げたように、今、私の社会科学部研究科でも宇野派は一人もいなくなりました。宇野派といっても、今の若い人にはまったく知識もありません。高橋幸八郎を知っている人もほとんどいないでしょう。誰も読んだことはないと思います。もちろん、それでもいいと思うのです。今、うちの研究所にいる同僚たち

はそれぞれの分野の世界の最先端の研究をしています。その多くが、そもそも日本語で本を書きません。論文はすべて英語で書くという人が主流となりました。世界の最先端の研究をやっている、それぞれの分野において立派な仕事をしているという意味で、なんら文句を言うべき必要はありません。ただ、今、私は社研の全所的プロジェクトのリーダーになりましたので、最終成果は本で、日本語で書いてくれと言うと、いやな顔をする人もいます。日本語で書いても業績にならないということです。その延長線上に、日本の社会科学の歴史は知らないし、知る必要もないと言います。私は、これにもどうしても躊躇があります。

たしかに、それぞれの分野において、世界の最先端を英語で研究するというのがなんら問題はありません。それでも、日本における社会科学、しかも同じような分野で直近の過去にあった研究すら知らない、知る必要もないと言いつられると、はたしてそれで日本の社会科学として正常なことなのだろうかと考えてしまうのです。もちろん、当然に過去のものを学ばなければいけないというわけではありません。とは言っても、日本の社会科学のある種の縦軸と言いますか、歴史的な問題意識を蓄積していくというプロセスを欠いてしまった場合、日本の社会科学というのは本当に発展していくのだろうかという点について、これも松本先生にご質問というよりは、私自身日頃向き合っている問いとして、松本先生のご指摘を受けて、さらに考えたということだと思います。その意味で、考える重要な問題をご指摘いただいたと感謝して

おります。ありがとうございました。

松本 一番目の問題は、やっぱり知識と知識人を区別すべきだと思います。知識人はもうなくなっても私はいいと。だけれども、知識というものの存在意義はなくならない。知識にもいろいろあるけれども、つまり情報とかそういう断片ではないところで、要するにものを考えるということの意義はやっぱりなくならないと思うので。知識人と知識というものを区別して考えたほうがいいんじゃないかというのが私の考えです。

それから二番目は分野による違いはあると思います。要するにもう英語で書かなければいけないというのは、自然科学の人はみんなそうだし、社会科学でも経済などはほとんどみんなそうなっていく。それはしょうがないと思うんですけどもね。ただ、歴史学はそう簡単にはいかないんじゃないかという感じがします。

趙星銀 どうも松本先生、ありがとうございます。特に元社会主義者たちが、社会主義があまり積極的な意味においては語られなくなった時代において市民社会を語りはじめたというご説明、非常になるほどだと思います。あと、今宇野先生のコメントについてお答えくださった知識と知識人を分けて考えるという点についてですが、知識といても knowledge であるか、あるいは intelligence であるかによって、その担い手は変わってくるのではないかと思います。なので、知識の担い手として、たとえば情報化社会における集団知性といったこ

とばも使われていると思うのですけれども、そういうふうな情報を共有しながら形成されるものとしての知識と、知性というものはやはりちよつと違うんじゃないかなと若干思うところがあります。

あと、たしか一九六七年だったと思いますが、丸山先生と、たぶん加藤周一さんも参加されたと思うのですが、「日本の知識人」という座談会がありました（『丸山眞男集 別集 第三卷』岩波書店、二〇一五年所収）。そのなかでいろいろおもしろい論点がありました。中でも、政治と経済の構造変化を踏まえて「ここでいう知識人は『intellectuals』ではなく、educated class 一般を指す」という角度から問題が設定されていたことが印象に残っています。

とはいえ、やはりそれでも、私の考え方が古いのかもしれませんが、知識人の威信とか、知識の権威が尊敬されるような時代は終わったとしても、やはり知識人として担ってきたいろいろな役割は残るのではないかというふうに思います。そのような役割自体も、だんだんと集団の力の方向へと多数化していく傾向があると思うのですが、そういう動きにまったく問題はないかという点、ちよつとやっぱり躊躇します。

ついでに、非常にいい機会なのでお聞きしたいことがあるのですが、さきほどプライのなかで、欧米の社会科学者のなかではラスキが信用されないというふうにおっしゃったのですが、その理由は何でしょうか。転向したからなのでしょうか。

松本 いや、要するにコミュニズムに宥和的だったからです。

趙 スタンズが問題ということですね、なるほど。

ついでにもう一点だけお聞きしたいのですが、松本先生ご自身はコミュニズムとソーシャリズム、共産主義と社会主義を意識的に分けて考えておられるのでしょうか。

松本 二〇世紀の問題として言えば、要するに国際共産主義運動と結びついたコミュニズムというものと、それに反対するソーシャル・デモクラシーという対抗関係という話はヨーロッパだけでも、日本でそのような見方がそのまま当たるかというと、つまり丸山さんの「ある自由主義者への手紙」だったか、要するに日本ではコミュニズムが、中国なんかも含めて、西欧的な自由、平等を促進する、そちらのほうで働いているのだということを言っている。そういう見方はやっぱりあります。

趙 どうもありがとうございました。

鷺巣 「知識人の時代が終わった」という認識があるのだとおっしゃいましたけれども、そういうなかで、しかし日本に知識人というのはいるわけでしょう。

松本 自称するか他称するか……。自称する人はいるんでしょうかね。

鷺巣 知識人という客観的な層が存在することはないとお考えですか。

松本 趙さんが言ったように、educated peopleとか、社会の分業のなかで、やっぱりそれは普通の他の人より学識を持っている人がいる

とか、そういうことはあるけれども。さきほど私、知識と知識人とは分けると言ったけれども、趙さんのことばでいえば知識というよりは知性と言ったほうがいいと思いますね。だから、教養、知、学識を持っている、あるいは学識を教えることを商売にしているということと、知性を持っているということはやっぱり別の問題であって。学識者とか educated people というカテゴリーはあると思います。それはあるけれども、要するに私が知識人の時代と呼んだときの知識人というのが、そういう学識を持っているであろうけれども、それを超えた、つまり知性を持っている人という前提があったわけでしょう。それはもう、ないことにしたほうがいいのではないか。どんなに学識のない人でも知性のある人はいると思いますし。

鷺巢 反知性主義の風潮に抵抗するとしたら、その担い手というのは？

松本 反知性主義に対して知性を擁護することは必要だと思いません。ただ、反知性主義は……半分は知識人のほうが悪いかもしれないから。

渡辺浩 お三方の報告に関連して三点お話しします。はじめは翻訳と社交に関連して、コメントです。鷺巢さんのご報告のなかで society の訳語の話がありましたけれども、実は私、ここ数年、幕末から明治初期における西洋の主要な概念の翻訳について本を書いています、そのなかに right も society も含まれているのです。その関連で

ちょっとご紹介しますが、society をどう訳すかは、当時、非常に難しい問題で、私の知る限りでも二十近い翻訳の試みがありました。「交際」とか「人間」とか「会」とか「人間公会」とか、「同社」「党」、それから「群」とかです。中国語での翻訳は最初「群」だったのです。

もう少し普通の日本語では「仲間」「連中」「社中」です。これは山崎さんが『柔らかな個人主義の誕生』であまり触れていない、江戸の遊芸の世界における voluntary association の呼称です。さまざまな遊芸のために集まってグループを作る。それが「社中」「連中」です。福沢は慶應義塾に集まった人々を「社中」と呼んでいましたけれども、そういうふうにも使われることばです。「仲間」はよく明治初期には society の訳語として使われることばです。「株仲間」というように団体も指すわけですし、社交も指すわけです。また「社会」というので何か抽象的になったというお話がありました、そう簡単ではないのです。というのは、「社」は、「社中」の「社」でもあると同時に、たとえば漢詩を作るグループがかなり早い時期から「何とか社」と名のりはじめたのです。「混沌社」とか、そういう漢詩グループが江戸時代にたくさんできました。これが voluntary association のモデルになって、明治に入ると「明六社」「同志社」「立志社」というように、自主的な団体が一齐に「社」を名のるのです。Society なんです。そのモデルは遊芸の「社中」です。新聞や本を発行する人々は、少し自由民権的自主的団体の気持ちがあるので、いまだに新聞会社と言わないで新聞社と言い、雑誌会社と言わないで雑誌社と言い、出版会社



と言わないで出版社と云うのです。講談社とか新潮社とか、あれもかすかに自由民権、明治の匂いがあるのはそのためです。ですから、この「社」というのはなかなか深い背景のあることで、遊芸における社交、それと翻訳というのが絶妙な交じり合いをした例なんです。そういうのが私の本の一章ですので、ちょっと、こういうおもしろいことがありますよというのを紹介します。

次に、戦争によって留学の機会を逸した人、世代、であるにもかかわらず近代ヨーロッパの思想と学問を深く理解したという逆説についてですけれども、たぶんこれは逆説ではなくて、それゆえにだつたと言えるのではないかと私は思います。さきほどのお話があつたように史料に沈潜して徹底的に原典を読みこなそうという努力がなされて、そしてその結果としてある意味で深い、ある意味で独特な、だから悪口を言えばガラパゴスですけど、別に言えばそれなりによく西洋を理解したものが出てくる。同じことは江戸時代の儒学で起きたと思うのです。中国とは切れている。誰も行つたことはない。本だけ読んでいます。そして原典に沈潜して、『論語』の本当の意味は何か、君のは誤訳だ、いやそういうお前こそ誤訳だと言いつつ、どんどん深いものになっていくという現象が起きた。これはやっぱり、中国に留学していたら、本場の儒学に接していたら、そういうことにはならなかつたと思います。やっぱり独特の知的な展開がなされるには、少し距離を置いているということが必要で、のべつ留学して向こうの流行に乗って、向こうのことで書いていただけでは、独自の学問は進展し

ない。

三番目ですけれども、趙さんのご報告で、資料一ページの読むのを飛ばされた「実用」目的を優先した学問の輸入」というあたりからなのですが、そのことは松本さんの本には書いていないのです、「実用」目的重視というのは。そうとも言えないのではないかと私は思っています。だって、最初にベストセラーになった本格的な翻訳書の一つは *On Liberty* ですから。そして、哲学ということばを早めになつて、やっぱり哲学をやらなければだめだというふうになつて、やっぱり哲学をやらなければだめだと思つても、形而下だけではだめで、形而上をやらなければいけないというのは非常に早くからあつた。決して卑近な意味での実学を取り入れるという学問のあり方ではなかつたと思つています。しかも、カール・レーヴィットの指摘を引かれましたけれども、私がおもしろいと思うのは、日本人自身が不断にそう思つていて、我々は皮相ではないか、我々の理解は十分じゃないか、いや君はまだ本物じゃない、いや私こそ本物だ、いやそういうお前こそ本物じゃないというふうには、本当に理解しなければ、本当に理解しなければという強迫観念に駆られているようにやっています。そこが日本のおもしろいところではないかと思つています。中国の知識人はあまりそういう悩み方をしなかつたような気がします。今もそうだと思いますけれども。もう分かつた、という感じに早くにナルクス主義だかマルクス主義のようなのを發展させるといふことが

起きている。日本のほうは、さつきともつながりませんが、原典主義で本物でなければいけないという強迫観念に駆られているところがある。以上、大雑把に三点です。

趙 私のほうから少し弁明というかりプライさせていただきます。どうも渡辺先生、ありがとうございます。さきほどちょっと飛ばした箇所なのですが、その文脈は、フランスにおける知識人の時代と、それに対応するようなものが日本においても見出されるという部分です。しかし欧米と日本とではやはり違いがあるということで、それを私なりに三点に分けて、その一点目にあたる内容です。確かに松本先生ご自身は「実用」ということは書かれていなかったような気がして、今、本当にやってしまったと思ったのが正直な感想です。ただ私がこういうふうにとめた根拠というのは、二三ページあたりですが、確かにこれは学問の受容というよりは、日本の近代教育制度に関する分析がなされているところですね。少し読み上げますと、「日本の近代の教育制度は、ロナルド・ドーアなども言うように……近代化の後発国の共通の課題、先進国の技術の組織的移転を効率的に行なうためのシステムであり」という段落です。私が「実用目的を優先した学問の輸入」という印象を受けた箇所は、松本先生が書かれた、明治期における、「日本の学問は共通の基盤ぬきに専門分化した個別領域」とに発展し、近代日本の専門知識人は初めから専門エリートとして出発したという、丸山眞男の周知の指摘……がなされる」といっ

たところですか。つまり、大正期の教養主義と言われるような動きは、明治期の専門分化された知の世界に対する反発として登場したというふうに読んだのであります。そして実用目的優先の学問の輸入の例として Theodore D. Woolsey の *Introduction to the Study of International Law* (1860) を纂作麟祥が訳したときに、原論的な部分は省略されていて、その技術的、実用的な部分だけが最初訳されたという事例をちょっとご紹介しようと思った限りです。

ついでにカール・レーヴィットの「二階は洋式、一階は和風で、梯子を掛けて上がり下がりしている」という日本の知識人の精神的二重生活に関しては、元々は私も原稿を書いたときには、はたしてこれはそんなに悪いものかという疑問をいささか感じていました、むしろそこに何かの可能性はないかという文言も書いたものでして、今渡辺先生のご説明をうけて、なるほどと理解できました。以上です。

宇野 今回の渡辺先生のレスポンスを、私も本当におもしろく受けとめました。これは松本先生の今回のご著作と結局通じるテーマだと思えます。日本の学問というのが一番多産になるのは、のべつまくなく輸入をしているときではない。外との一定の距離があるときに、しかしながらあくまで原典主義に立ち、原典を徹底的に読み込むときに、もっとも日本の学知というものは発展する。そうだとすれば、これは重要な仮説だと思います。一つ間違えば単なるガラパゴス主義であって、勝手に読み込んでいただけだということになるのかもしれないが、そうでない瞬間がある。今日の松本先生の本で言えば、近代日本

の社会科学において、留学が一番できなかった世代においてもっとも多産であったとすれば、これはやっぱりものすごくおもしろいテーマだと思います。では逆に、これからどうしたらよいのかというと、また少し鎖国したほうがいいのかという話になって、それもいかがかと思うのですけれども、十分に考えていかなければいけない重要なテーマだと思います。本当にありがとうございます。

松本 今の宇野さんのお話しはその通りなのですが、ただやっぱり、さきほど高橋史学の話をしましたが、距離を置いて、後から聞いてなるほどというものと、全然忘れてしまうものと両方あると思います。その区別はいつたどこでつけていくかというのは、なかなか難しい。

宇野 一言つけ加えると、今ちょっと、仲間たちとはじめているプロジェクトで、高橋幸八郎とルフェーヴルの、ある種知識社会的な結びつきを、比較の視座から研究してみようと考えています。ある意味で日本とフランスの知識人のあいだに同時並行性があり、どっちがどっちに、単純に影響を与えたかどうかは分からないのですけれども、明らかにその結びつきが重要であり、歴史的に検証するというのは非常におもしろいと思っています。

松本 どういう人たちを動員してやるのですか？

宇野 松本先生がご存知のみなさんですけれども、中心になっているのは高山裕二さんとか伊達聖伸さんです。特に戦後歴史学とフランス歴史学の相関について議論できる若手、中堅の研究者がいないか、

今一生懸命探しているところです。ぜひよい方がいたらご紹介ください。絶対これはおもしろいテーマだと思います。高橋幸八郎とフランスという同時並行性、ある種の関係性というのは、今日、あらためて社会科学において追究すべきですし、別にこれは高橋幸八郎だけではなくて、今日議論が出たように京大の人文研、桑原武夫以来のフランス研究も、知識社会的にもう一回再検討したらおもしろいと思っております。

松本 若くはなくて、僕の同世代だけでも、京大系の谷川稔さんは、まさに戦後史学というカテゴリーで、要するに高橋史学に対して俺たちは挑戦したのだと言われる。谷川氏によると、遅塚忠躬さんが戦後史学の最後の人、「戦後史学のゴールキーパー」だと言うんだ。それに対して、自分は「全共闘史学」だと言う、谷川さんは。こっちの呼称は、僕は「えっ？」と思いますが、先行する学問に対してきちんと対決する姿勢は、やっぱりあった方がいいと思うのです。みんな忘れてしまうよりは。

宇野 ご指摘の通りだと思います。

山辺春彦 最後に一点だけ、鷺巣先生のご報告の最後のところで、共同研究の必要というところから丸山眞男記念比較思想研究センターの可能性について触れていたところについて、私から少しだけこれに関連してお話しさせていただいてもよろしいでしょうか。鷺巣先生がセンター長を務めておられます立命館大学加藤周一現代思想研

究センターでも非常に活発にこういった共同研究を進められているかと思えます。丸山センターでは丸山眞男文庫という膨大な原資料を抱えており、その整理がまだ完了していない段階ということも一つあるのですけれども、まず戦後の知識人の資料について、どういったものがあるのか、それがどのような整理をされていて、どのような利用ができるのかといった情報をみなさんと共有することが、戦後思想の研究がこれから発展していくためには必要なのではないかと考えております。そうした情報共有ですとか、各地の研究センターや文庫との繋がりを深めていくという方向で、これから戦後思想史の研究に貢献することをめざしているところです。なかなかすぐには共同研究を組織することは難しいのですけれども、そうした形でさまざまな知識人が遺した資料に関する情報をうまく提供する活動を行っていきたいと考えているところです。

**鷲巢** そういふ点で言えば、立命館大学加藤周一現代思想研究センターも同じでして、すぐに共同研究に踏み切れるような状況にはなく、抱えている膨大な資料をどのように整理していくか、どのように公開していくかというところで、遅々としか進んでいないのです。一方、どこの大学もみんなそうなのだろうと思うけれども、非常に財政的に厳しい状況にありますよね。そういうなかで、どうやって研究センターを存続させていくかという問題がありまして、したがって一つの大学のなかで一つの研究センターが、特に加藤センターは私が外部の人間ですから発言力はありません、そういうなかで維持していくのは

かなり難しいのです。そういう点では今後、ゆくゆくは共同研究のようなことが行われれば、それはそれに越したことはないのですが、その前の段階で可能な限りの提携の作業をやっているだけでいいと望んでおります。

(文責・山辺春彦)